

ドイツ滞在記

生物生産学部 八瀬清志



マインツのマックスプランク高分子研究所の全景

我々家族（妻、2歳の長男および私）は、1989年11月22日より1991年1月31日まで14か月間、Alexander von Humboldt-Stiftung（フンボルト財団）の奨学生として、「西」ドイツのMannheimでの2か月間の語学研修の後、MainzにあるMax-Planck-Institut für Polymerforschung（マックスプランク高分子研究所）のProfessor Doctor Gerhard Wegnerの下で、高分子薄膜の構造の研究を行ってきた。仕事の内容は別のところに記しているのを参照されたい^{1),2)}。

我々の滞在時期は、東西ドイツの統一、東ヨーロッパの政治的・経済的危機と欧州共同体会議、そして湾岸戦争と、歴史的に見ても非常に興味深い一年であったように思われる。我々の帰国後のあいさつに対する相手方の質問は、必ずといってよいほど、これらの「歴史の一面」を見たかというものであった。最初に断っておきたいが、衛生放送を始めとして、これほど情報が世界的に速く伝わる世の中では、我々が一夜漬けて学んだドイツ語で

理解できた量よりも、日本で毎日のように流された上記のニュースを見られた人の方が、おそらく「正しい」理解をされているように思われる。しかし、片言のドイツ語で聞いた「生」の声を極力述べていきたいと思う。

また、「ドイツ人の印象は」と問われて日本人が答える「ドイツ人氣質」は、「厳格・まじめ・几帳面」の3つになると言われている。確かにこれらの性格は、我々が出会った人たちに顕著に見られた傾向である。しかし、15~20歳の若い層は、日本と同じく新世代を形成しており、我々にも違った印象を与えた。徴兵制の影響もあると思われるが、仲間同士で集まっては、ワイワイ・キャアキャア騒いでいるように見えた。他人に対する礼儀がないというよりも、大人や社会に対する「反抗期」の年代である。それ以下の子供達は、両親の厳格な「しつけ」の影響で、おとなしくて礼儀正しい古き良きドイツ人のミニチュアであった。まず、ベビーカーに乗った赤ん坊の泣き声を聞いたことがない。これは、「おしゃぶり」のようなものを口にくわえていることもあるが、恐ろしいほど親の指示に従っており、人前では泣くことはおろかしゃべることをしない。さらに、小学生も列車・バスでは、必ず年輩者や婦人に席を譲り、ベビーカーなどで乗り込もうとする人にしごくすんなりと手を貸していた。また、一般人は年を取れば取るほど上記の3つの性格が強いように感じられた。逆に、我々にはお節介としか感じられなかったが、老（婦）人が、我々の生活・買い物に自分の考えを押しつけて、指揮・説教してくれるのである。家・部屋の周りの掃除の仕方なら了解できるが、窓の飾り

付けから始まって、洗濯ものの干し方（ドイツでは、日本のような「満艦旗」はできず、人目に洗濯ものが見えないようにすることが礼儀であるらしい）、食料品の好みまで教えてくれる。食品、特に、ワイン、チーズやハムの種類は無数にあるので、我々には選択することは容易ではないが、少なくとも、彼らの趣向とは我々はまったく違うにもかかわらず、自分たちの好みを押しつけてきた。さらに、切符の買い方や列車の行き先などを尋ねようものなら、まさに喜んで教えてくれるが、時々間違えていることがある。これは、我々のたどたどしいものの聞き方にも問題があったと思われるが、我々はその過ちを指摘しても、いったん自分が言ったことはなかなか撤回しようとしない。もし、第三者がそれを正しても、2人で議論を始めてしまって、我々の存在を忘れてしまう。また、地方差という



マインツのドーム

ものも存在し、南にいけばいくほど人なつっこくて保守的になっているように思われた。我々が滞在した Mainz は、地理的には中部ドイツになるが、Rheinland-Pfalz 州の州都として、南に広がる葡萄産地をかかえているので、Köln, Düsseldorf, Hamburg そして Berlin でみられるような、都会人とは異なる人種のように思われた。これは、歴史的産物だと思うが、もし欧州旅行または留学を計画される人がおられれば、ドイツ、フランスの南およびイタリアをお勧めする。ただし、外

国人としての日本人にとって最も安全な国・地域はドイツ語圏である南ドイツ、オーストリア、スイスである。



トリアーの宮殿まえ 時折、室内楽が催される。

さて、欧州滞在記の本題に話を戻す。私の場合、ドイツでの生活は、Mannheim の Goethe-Institut (GI) での語学研修で始まった。東ヨーロッパ、アジア、アメリカ、アフリカからの留学生・労働者が短期間でドイツ語をものにしようと熱っぽく勉強していた。それは、GIでの卒業・終了証書は、大学の入学試験の一つの資格になること、ドイツでの生活を始めるためのビザの発行はGIへの入学が最も有利であること、および実際に働くためには語学が必要なことなどの理由で、我々が大学の教養レベルの語学の授業または日本での語学学校の雰囲気とはまったく異なるものであった。私の場合は、GIの授業料その他一切を AvH が負担してくれたので問題はなかったが、自費で学んでいる人たちは、彼らの生活レベルからすると極めて高い（2か月の授業料が寮の費用を含めて2,000-2,500ドイツマルクであり、ドイツの一般労働者の月給が3,000-3,500マルクと聞いている）ので、学べるものはなんでも吸収し、一刻も早く「しゃべれる」ようになろうと教師に食いついていた。特に、「東西」の壁が実質的に破れていたので、「東」からやってきた人たち専門のクラスが編成されていた。彼らの場合は、まさしく仕事を得るための必

須の条件であったので、特別のカリキュラムで迅速な「同化」を目指していた。また、政治的に不安定な国からの留学生は、留学中の政変のために、帰るべき場所を失ったものもいた。さらに、私の印象では、韓国からの留学生の態度に、我々日本人には見られない真摯な態度が感じられた。この点から見ても、日本が経済的に韓国を始めとした新興国に追い抜かれる日が近いと思われた。

GIでの研修中に我々が住んでいたところは、ドイツ有数の化学会社である BASF の城下町である Ludwigshafen のはずれの「村」であった。ここは、Rheinpfalz ワインの中心地でもあり、労働者と農民が多い町であるが、のどかな古き良きドイツの雰囲気を感じられる町であった。宗教的には新教と旧教の教会が並立しており、それぞれの信教に従って、それぞれの教会に毎日曜日に家族中で正装して参加し、クリスマスなどの宗教的行事やワイン祭などを町を挙げて楽しんでいた。労働者用には、新しい住宅地が次々と供給されており、それらが一定の景観を与えるように設計されていた。それらの価格も庭付き一戸建て（通常、地下室と屋根裏部屋を含む2階建て）で3,000-5,000万円ほどで、日本の状況からすると考えられないほど安いものであった。婦人の就業率も高く、日本でよく見かける売り子や幼稚園の先生はもちろんのこと、タクシーやバスの運転手を含めて、男性労働者と互して働いていた。これは、歴史的な労働運動の成果だと思われるが、彼らの労働を保証するように、勤務時間や生理休暇などの労働条件も完備されているようであった。御存知のように、労働時間は、朝8時から17時までであるが、昼休みが2時間あり、金曜日の14時から月曜の朝までは休みである。また、日曜日には、家庭内での騒音を極端に嫌っており、掃除・洗濯も「御法度」である。したがって、日曜日は、完全な休息日で、家のなかでテレビを見ている（これは、我々日本人の標準的な暮らし方）か、散歩・散策を楽しんでいるようであった。幸い、商店街や百貨

店のショーウィンドウは商品の照明展示をしているので、将来の買い物の選択を町を散策しながら楽しんでいるようであった。さらに、それぞれの職場・地域・同窓生・仲間からなる Gesellschaft の集まりがあり、一緒にスポーツを楽しんだりビール片手に議論したり、サッカーなどのスポーツ観戦で一日を過ごしていた。

研究所のある Mainz は、ローマ人の入植以来千年の歴史を持つ古い町であり、古くは大司数の門前町として栄え、活版印刷術の Gutenberg 州の生まれた町として有名であり、現在は先に述べた Rheinland-Pfalz 州の州都として、また日本でも衛星放送で受信可能なドイツ第一テレビ（ZDF）の放送局がある。大学は、1400年代に創設されたが、Napoleon の侵攻で廃止の憂き目に会い、第二次大戦後復興された。研究所はそのキャンパスのはずれにあり、ドイツの大学生の姿を片目で見ながら、毎日自転車を通った。一般的に、大学生はおとなしく良く勉強しているように見えた。授業中のことは分からないが、構内のベンチや図書館で原著をひたすら読んでいる風景が印象的であった。ただ、アベックがやたらと多くて、いたるところで「仲良く」しているので、目のやり場に困るほどであった。研究所には、Johannes Gutenberg Universität（略称、マインツ大学）の4年生（つまり卒業試験前の学生）と博士課程の院生、Post Dr. が150名ほど、それに私のような外国人の客員研究員が50名、Project Leader と呼ばれる研究指導者が20名、研究所の Director としての教授が4名、そして事務官・技官を合わせて350名ほどが在籍していた。研究内容は多岐に渡るのと別のところで報告しているのでここには示さない^{1),2)}。しかし、特に若い学生の研究に対する態度は、日本におけるそれとは全く異なっていた。一言でいえば、先に述べた「議論好き」の性格を反映して、暇あるごとにダべっていた。具体的には、各実験をサポートする機器測定やデータ解析は Technician と呼ばれる技官や計算機

が行うので、研究者は基本的に、研究目的の設定とその解釈を行えばよいので（おそらく、こういう姿が本当の研究だと思う）、専門分野を越えてその意義や考察を幅広い視野で行うことが逆に必要になるように思われる。私のような、分子オーダーの構造評価には特別の観察技術が必要なので、研究者自らが検鏡する必要があるが、制度的にそれが許されず、実際に技官との一悶着があった。Technicianには彼らなりのプライドがあり、また、それだけの技術を持っているので、その仕事を奪うことは許されなかった。また、学生の「勉強好き」も目に付いた。彼らは、先に述べた議論以外の時間は自分の机に向かって、ひたすら文献または本を読んでノートにまとめている。その合間に実験を行うようで、時間の許す限り、いわゆる「お勉強」である。これは、卒業論文や博士論文の執筆には不可欠の要素で、百数十ページの論文の大半を研究の背景および原理に費やし、それらを事細かに記述していた。また、博士号申請の公聴会においても、研究の意義や動機を主に説明していた。さらに、その後の口頭試問でも、各審査委員（大学教授）がそれぞれの専門分野の基礎的な内容について質問し、それにグラフや数式を使って答えることが義務付けられていた。将来、博士号を申請する学生達も出題傾向と「模範」回答をひたすらメモしていたことが印象的であった。



マインツのカーニバル風景

さて、研究面での議論はさておき生活面では、毎月のように開催されている各種の「お祭り」（2月のカーニバル、4月の市民祭、6月のグーテンベルグ祭、7月の花火祭、8月のワイン祭、12月のクリスマス市、等々）で、街の中心にあるマルクト広場は、露店が並び、就業後に家族・仲間とともに繰り出して、ワイン、ビールなどを飲みながらワイワイ議論していた。また、その露店の中には、民芸品を販売している店もあり、郷土色豊かな品々が陳列されていて、見ているだけで我々には楽しかった。MünchenのOktober Fest（ビール祭）は世界的にも有名で皆さんもテレビ中継などでその雰囲気を知りかと思うが、その小型のものが各町で繰り広げられているわけである。今年（1991年）のカーニバルは「湾岸戦争」の影響で中止になったが、去年はソ連の東欧政策の変化や東西ドイツの統一を時代的背景として、各種の「ダシ」が町中を練り歩いた。さらに、7月のサッカー



ベルリンの壁
1 かけら15~30ドイツマルク
(1,300~2,500円)

の World Cup での優勝が決まった時は、深夜にもかかわらず、三々五々若者が中心に街へ繰り出して騒いでいた。ちょうどその頃、「東西」ドイツの貨幣統一で、政治的統一への足掛かりが得られたこともあって、ドイツ国民にとっては嬉しい瞬間であったと思われる。しかし、ドイツの統一と来年に予定され

ている欧州経済機構の発足は、我々の身の回りのドイツ人を見る限り、彼らには影響がないように見えた。逆に、それらを「冷ややかな目」で眺めているだけで、自らの意見を主張するようでもなかった。1990年12月に行われた統一ドイツの初めての国政選挙においても、予想通り H. Kohl の率いる CDU（キリスト教民主同盟）が第一党となった。彼らにとっては、「芸者スキャンダル」で党首がリコールされたにもかかわらず、選挙でその政党が大勝したことや、彼らには異文化の「Emperor の即位式」が話の種になるようであった。さらに、「湾岸戦争」では、「金は出すが兵隊は出さない」2つの経済大国の国民として、その違いを感じたことは、彼らは少なくとも国際政治の下で発言できる政治家を

持っていることであった。彼らに言わせると、「口も出さないのに、よくもあれだけの大金が出てくるものだ」という驚きの言葉であった。

以上、散文的に思いつくままの文章を記してきたが、与えられたスペースがなくなったので、中途半端であるが、ここで話を終えることにする。最後に、長期の海外研修をお許しいただいた関係各位に紙面を借りてお礼を申し上げる。

引用文献

- 1) 表面科学, Vol.12, No.2 (1991) 123-125.
- 2) Molecular Electronics and Bioelectronics, Vol.2, No.2 (1991) 掲載予定。

